

横芝の碑 (その四十二)

―古村栗山村を伝える―

―万霊供養碑と石塔群―

栗山青年館の庭先に、最近忽然として墓石と石仏の群像が出現し中央の黒色艶出仕上げの碑には、この供養についての趣旨が次の様に刻まれています。

「清流栗山川の名は、もと流域随一の古村我が栗山に出づ、ここ肥沃の地は、遠く祖先の開くところにして、その集落は、爾来幾世代平和に維持され漸次進展して今日に到る、然るに先人の墓石其他中途にして、或いは草木に蔽はれ、或いは土中に埋れ、殆んど無縁の石塔に化さんとす。有志の人々これを憂い、報謝の誠を以って、それら一々を発掘洗淨して淨地に移し、新に供養の碑を建つ、願くば先亡の各霊速かに菩提を成して永く郷土の平安と繁栄に冥加を加えられんことを。昭和五十一年春彼岸」と記されています。

青年館の建っている場所は、昔は僧都級の住職が住んでいた程立派な寺で、明治七年には、その本堂で、小学校の草分けともいえる栗山学校が開設される等、なかなか栄えていたようです。明治の中頃、台風で寺の本堂が倒壊したことがありました。丁度その頃、寺

が衰微していたこともありまして、本堂の改築はできず、松尾八田村から古家屋を買って移築し校舎にしていました。それが、青年館が建つまで使用されていた集会所なのです。

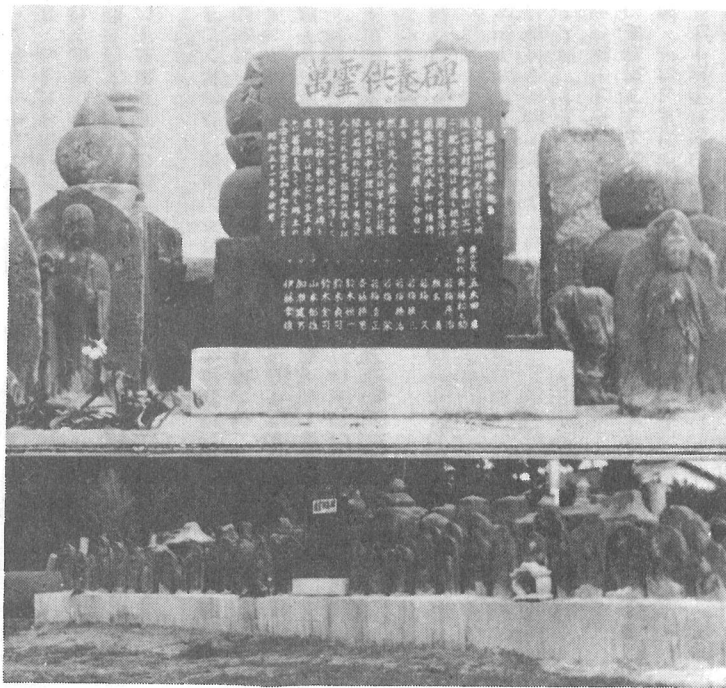
寺の敷地はなかなか広かったのですが、謂所墳墓という遺体を埋める場所はなく、石塔だけを建てて供養する、卵塔場だけがありました。石仏や墓石の建っている辺り一帯は、その跡だといわれています。時代の変遷は建物の使用目的と共に境内の使用目的をも変えました。そして、その影響は卵塔場にも及び、墓石や石仏は、何時か境内の一隅に移され、積重ねられ、碑文にある様に土中に埋もれ草木に蔽われたりしてしまいました。

しかし、陽の目を見ずに過ぎた石塔や石仏にもやがて陽の目を見る日がやってきました。栗山に青年館が建設されることになり、その敷地跡を整理している中に、続々と発見される石塔や石仏を見た心ある人々は、「これでは先覚者に申訳がない」と考えられたのです。中でも、第三部落

鈴木貞司さん(現町議)は、その祖父慶次郎さん(元町議)が癌で逝くなられてから後、或要職に就かれた栗山出身の方が、何人か同じ病に犯されていることに、何か因縁めいたものを感じていました。折から、栗山周辺に死亡に繋る交通事故が発生していること等もありましたので、凡そ志を同じくすると思われる四九年度の区長斎藤勝男さん及び五十年年度の区長五木田 明さんと一緒にこの寺に深い縁りを持つ旧家である。斎藤松之助さんや若梅原次さん等を訪れ

たところ、総ての方が賛成されたばかりでなく、労力や金品の提供まで申出る程で、鈴木さん自身も終日自家用のブルトーザーを駆使して、その作業に当る等、本当に一致団結し睦まじさの中に昭和五十一年春の彼岸を契機として、この墓石と石仏の集取、そして、その趣旨を後世に伝える碑の建立が完成したのです。

○写真はその碑と、石仏墓石の群像で、碑の扁額には、万霊供養碑 世貴山四十六世 僧正寛照、と刻まれ、碑文の下には、栗山区長五



木田 明、寺総代斎藤松之助、若梅原次他協力された方々計十六名の氏名が刻まれています。

また、万霊供養碑の近うには、法印大僧都定録位、貞享三年九月法印勝榮律師、元録九歳、法印慶範覚位、正徳五年末、法印秋照享保十九年、権大僧都法印秋慶覚位元文二年閏十一月、法印大律師亮鏗、明治四年、等々、歴代住職のと思われる石塔が建っています。

また、墓石の中に、妙徳禪定尼冥位、寛文四辛辰年と刻まれたのが見えます。住職の石塔と見られる中で一番古い年号が貞享三年(一八九六)ですから、それより古い寛文四年(一六六四)というところ、今から三百年前になります。その頃は或いは尼寺であったのでしょうか、吉祥天が徳叉迦と、鬼子母神の間に生まれた女神でありこの寺の名称が吉祥院であること等を考えますと、物言わぬこの石塔の一つ一つに、何か話しかけて見たくなってくるのです。昭和五十一年春三月、万霊供養塔の建立は極めて新しいのですが、その塔が伝える歴史は三百年前に遡上り、そして、次の時代の人々に長く伝承されることと思います。(本稿取材に当り、栗山新田鈴木貞司さんの御指導と御協力があったことを申添えます。)

(養護老人ホーム小沢所長寄稿)